

琵琶〈びわ〉の塚〈つか〉（須磨区須磨浦通）

太政大臣〈だじょうだいじん〉藤原師長〈もろなが〉は琵琶〈びわ〉の達人〈たつじん〉でした。けれども自分の腕前〈うでまえ〉に満足せず、もっと上手なひきてになろうと、唐〈とう〉の国（中国）にわたる決心をしました。彼のかたい決意を、まわりの人びとも変えることができませんでした。京を出ていく日めかのことです。須磨をとおりかかった師長の前に、村上〈むらかみ〉天皇と梨壺女御〈なしつぼのによご〉の霊〈れい〉があらわれたのです。

「師長、都に帰りなさい。」「いえわたくしは唐〈とう〉にわたります。」長い問答〈もんどう〉のすえ、二人の霊はいいました。「それでは師長、そなたに琵琶のすばらしい腕前をあたえよう。」まさかと思いながら琵琶をひいた師長は、自分の腕前におどろきました。満足して彼は都へと帰っていきました。人びとはそこに村上天皇を祭る祠〈ほこら〉を建てましたが、その祠の後ろには、小さな古墳〈こふん〉がありました。この古墳には竜宮〈りゅうぐう〉から師長におくられたすばらしい獅子丸〈ししまる〉という琵琶がうずめられているので、土地の人びとはその古墳を、琵琶塚〈びわづか〉とよぶようになったということです。

